

本 塙 村 大 門 遺 跡

——本塙アクセス光設備埋蔵文化財調査報告書——

平成 9 年 3 月

日本電信電話株式会社

財団法人 千葉県文化財センター

もと の 本 城 村 大 門 遺 跡

—— 本城アクセス光設備埋蔵文化財調査報告書 ——



序 文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県文化財センター調査報告第313集として日本電信電話株式会社の本塁アクセス光設備工事に伴って実施した本塁村大門遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、旧石器時代の石器や中世の土器が出土するなど、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。この報告書が学術資料として、また郷土の歴史資料として活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を始めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成9年3月31日

財団法人千葉県文化財センター
理事長 中村好成

凡　　例

- 1 本書は、日本電信電話株式会社千葉支店による本塁アクセス光設備工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県印旛郡本塁村滝397-3ほかに所在する大門遺跡（遺跡コード328-004）である。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、日本電信電話株式会社千葉支店の委託を受け、財団法人千葉県文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業は、調査部長 西山太郎、北部調査事務所長 谷 旬の指導のもと、研究員榊原弘二が下記の期間実施した。

発掘作業 平成8年8月6日～平成8年8月22日

整理作業 平成8年8月23日～平成8年8月30日

平成8年12月1日～平成8年12月28日

- 5 本書の執筆は、研究員 榊原弘二が行った。

- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁生涯学習部文化課、日本電信電話株式会社千葉支店 本塁村教育委員会、鶴沢婦志氏の御指導、御協力を得た。

- 7 本書で使用した地形図は、下記のとおりである。

第1図 国土地理院発行 1/25,000地形図「小林」(N1-54-19-14-1)

第2図 本塁村役場発行 1/2,500本塁村都市計画図「4」「5」「8」「9」

- 8 周辺地形航空写真は、京葉測量株式会社による平成8年撮影のものを使用した。

- 9 本書で使用した図面の方位は、すべて座標北である。

- 10 本書で使用したスクリーントーン及び記号の用例は、次のとおりである。

旧石器時代 石器出土分布図の記号

(器種別)	* ナイフ形石器	△ 彫器	* 尖頭器
○ 調整痕のある剥片	● 使用痕のある剥片	□ 敲 石	
● 剥 片	・ 碎 片	○ 石 核	▲ 環 片
● 剥片利用石核			
(石材別)	■ メノウ	● 黒曜石	○ 安山岩
★ チャート	▲ 珪質頁岩	■ 砂 岩	□ 流紋岩
● 石英斑岩	* 变成岩	△ 頁 岩	

本文目次

Iはじめ	1
1 調査の概要	1
2 遺跡の位置と歴史的環境	2
II検出した遺構と遺物	5
1 旧石器時代	5
2 繩文時代	19
3 中近世	20
IIIまとめ	23
報告書抄録	卷末

挿図目次

第1図	土層柱状図	1	第10図	第1ブロック出土石器(4)	13
第2図	遺跡の位置と周辺の遺跡・文化財	3	第11図	第1ブロック出土石器(5)	14
第3図	遺跡周辺地形図	4	第12図	第2ブロック出土石器	16
第4図	旧石器時代ブロック分布図	5	第13図	第3ブロック石器出土分布図(器種別)	17
第5図	第1ブロック・第2ブロック 石器出土分布図(器種別)	8	第14図	第3ブロック石器出土分布図(石材別)	18
第6図	第1ブロック・第2ブロック 石器出土分布図(石材別)	9	第15図	第3ブロック出土石器	18
第7図	第1ブロック出土石器(1)	10	第16図	ブロック外出土石器	19
第8図	第1ブロック出土石器(2)	11	第17図	縄文時代遺物	19
第9図	第1ブロック出土石器(3)	12	第18図	中近世遺構実測図	20
			第19図	焼土遺構出土遺物	21

表 目 次

第1表 第1ブロック石器組成表	15	第5表 第3ブロック石器組成表	17
第2表 第1ブロック石器観察表	15	第6表 第3ブロック石器観察表	17
第3表 第2ブロック石器組成表	16	第7表 ブロック外石器観察表	19
第4表 第2ブロック石器観察表	16		

図版目次

図版1 遺跡周辺航空写真
図版2 調査風景 中近世遺構
図版3 第1ブロック出土石器（正面）
図版4 第1ブロック出土石器（裏面）
図版5 第2・3ブロック出土石器 ブロック外
出土石器 繩文時代遺物 中世遺物
図版6 中世遺物

I はじめに

1 調査の概要

(1) 調査の経緯と経過

日本電信電話株式会社は、本塁アクセス光設備の工事を計画し、事業地内の埋蔵文化財の取扱いについて関係諸機関と協議した結果、記録保存の措置を講ずることとなり、平成8年8月に財団法人千葉県文化財センターが発掘調査を実施することとなった。

(2) 調査の方法

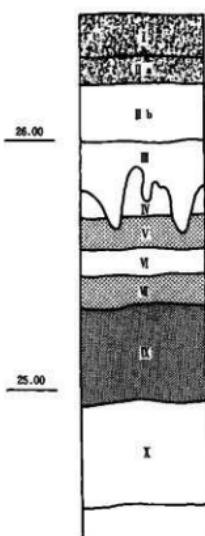
発掘区の設定は、国土地理院国家座標を基準とし、20m×20mの方眼の大グリッドを設定し、1Aと呼称した。さらに大グリッド内を4m方眼の小グリッドに分割し、西から東へ00・01・02…、北から南へ00・10・20…とした。したがって、各々の小グリッドは1A-10、1A-13等となる。

上層は全域の195m²を本調査とし、重機による表土除去後、遺構を調査した。下層の確認調査は2m×2mグリッドを1か所設定し、調査した。その結果、グリッド内及び調査区全体のソフトローム漸移層で遺物が検出されたので、195m²全域について本調査を実施した。

遺物は、小グリッド内の通し番号で取り上げている。

(3) 層序区分

本遺跡の現地表面から旧石器時代の遺物を包含する立川ローム層まで、発掘調査での観察を中心に層序区分を行った。以下1A-23グリッドの土層柱状図で、各層の特徴を記す。



第1図 土層柱状図(1/20)

- I 層：表土層である。
- II 層：a、bの二層に分かれる。a層は黒褐色土で、腐食土層である。b層は褐色土で、いわゆる新期テフラ層を含む層である。層厚約25cmで、下部はソフトロームに漸移する。
- III 層：黄褐色軟質ロームでいわゆるソフトローム層である。
- IV 層：黄褐色ローム土で、赤色スコリアを若干含む。ソフトロームのクラックが入り込んでおり、一部IV層が確認できないところがある。上部はソフトロームに取り込まれ、最下部が遺存すると考えられる。
- V 層：暗黄褐色ローム土で、赤色・黒色スコリアを若干含む。第1黒色帯に相当する層である。部分的にソフトロームが入り込んでいる。
- VI 層：明黄褐色ローム土で、AT（始良丹沢火山灰）を包含する。
- VII 層：褐色ローム土で、第2黒色帯上部に相当する層である。
- IX 層：暗褐色ローム土で、第2黒色帯下部に相当する層である。ややVII層より暗色化している。間層にやや明るいロームがブロック状に認められる。
- X 層：黄褐色ローム土で、立川ローム最下層に相当する。

2 遺跡の位置と歴史的環境

大門遺跡は、本塙村滝に所在する。本遺跡は、東は印旛沼（印旛沼北部調整池）に流入する小河川により、西は手賀沼に流入する小河川により開拓された台地上にあり、標高26m前後を測る。本遺跡付近は、とりわけ印旛沼水系側の支谷と手賀沼水系側の支谷が近くまで入り込んでおり、台地の幅が極端に狭まっている場所にある。

本遺跡は、今回の調査区の県道をはさんだ南北側で、昭和46年に発掘調査が行われ、塚6基が検出されたほか、旧石器時代の石器、縄文土器が出土している¹⁾。

本遺跡の南東の島状に突出している台地には、龍腹寺跡(2)がある。現在の龍腹寺(3)は、この龍腹寺跡から南東約1kmの地点にある。龍腹寺は大同2年(807年)の創建と言われ、永正4年(1507年)に北条氏によって焼き討ちに合い、その後天文19年(1550年)に寺地を現在の地に移したという記録がある²⁾。この龍腹寺跡が創建時の龍腹寺の所在地として推定されている。本遺跡の名称となった「大門」も旧龍腹寺の大門跡であったという伝承から、この付近の小字を大門と呼んでいる³⁾。今回の調査では大門跡とみられる遺構は確認されていない。

本遺跡周辺には、多数の遺跡の存在が確認されている。遺跡の西方で広範囲にわたり千葉ニュータウン埋蔵文化財調査が実施されており、それらの遺跡の様子が解明されつつある。しかし、ニュータウン造成事業外については調査例が少なく、その解明もまだ充分とは言えないのが現状である。

旧石器時代の遺跡は、北総台地でも印旛沼西岸は特に遺跡の多いことで知られている。本遺跡周辺では、IV～V層から石器が出土した宗甫遺跡⁴⁾(4)、III～IX層から多数の石器がブロックで出土した五斗町遺跡⁵⁾(5)、III～IV層から石器が出土した向原遺跡⁶⁾(6)などがあげられる。

縄文時代の遺跡は調査例は少ないが、早期の沈線文系と条痕文系の土器、前期の纖維を含む土器が各所で出土している。

中世では、地名や土壘・溝などから、城砦跡が多数確認されている。周辺の遺跡では、小林城跡⁷⁾(7)の調査が行われており、中世城郭の築城から廃城の過程を知る上で多くの成果を上げている。寺院関係では、先に上げた龍腹寺跡がある。文化財としては、現在の龍腹寺に南北朝期ごろの梵鐘、龍腹寺と同年代の創建と伝えられる蘆水寺(8)に建武5年(1338年)銘の梵鐘がある。

近世では、印西市から白井町にかけての広大な台地上は印西牧として使用され、馬土手等の遺構が残っている。牧周辺では数多くの畑作新田開発が行われ、この新田が野馬によって荒らされるのを防ぐために馬土手と同じように築かれた「野馬除土手」が向田遺跡(9)等で見られる。また、本遺跡の調査区脇の路傍には、寛政10年(1798年)造立の庚申塔がある(図版6)。それには、「天下泰平寛政十庚年天青面金剛王日月清明十一月朔日」と刻まれた銘文が見られる。

注1 白石竹雄他 1974 「千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書II」 千葉県都市公社

2 前掲注1文献

3 落合章雄 1993 「千葉北部地区新市街地造成整備事業関連埋蔵文化財調査報告書！」 財團法人千葉県文化財センター

4 前掲注3文献

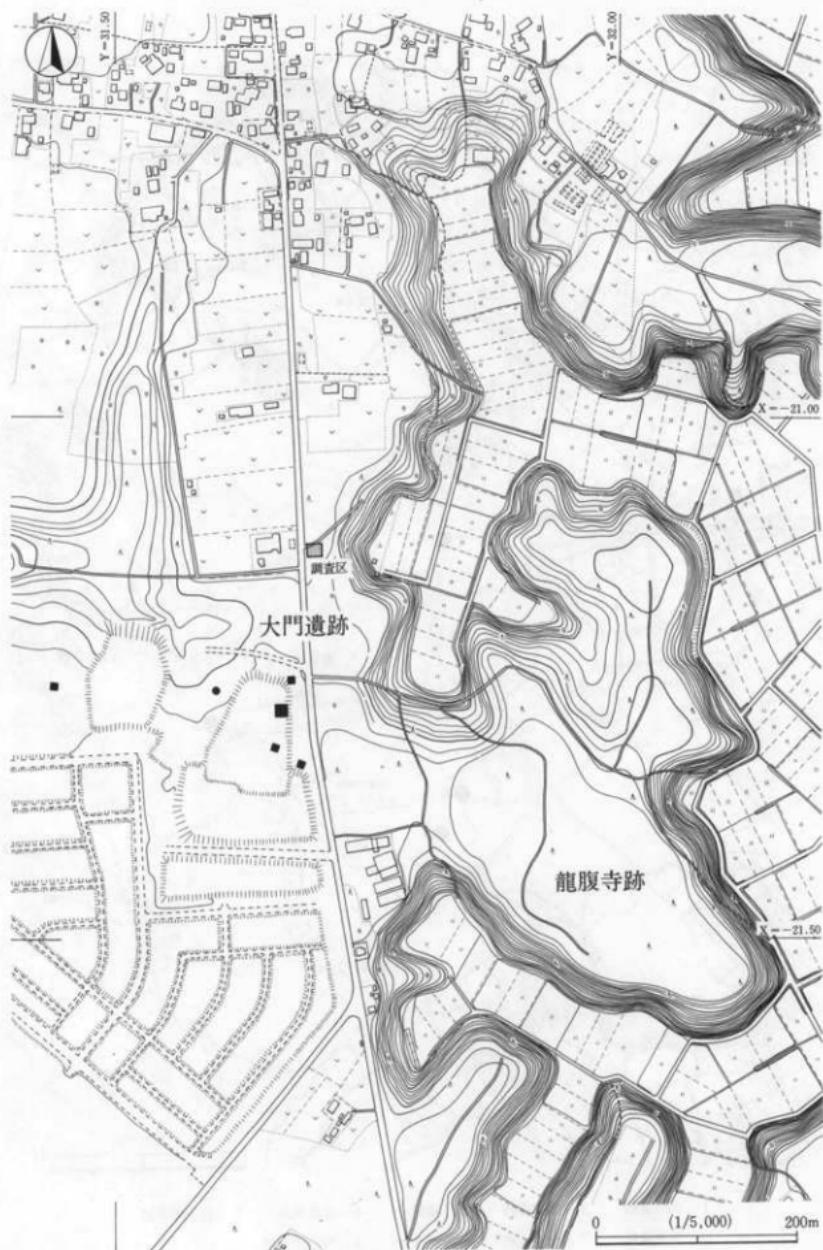
5 前掲注1文献

6 井上哲朗 1994 「印西町 小林城跡」 財團法人千葉県文化財センター



1. 大門遺跡 2. 龍腹寺跡 3. 龍腹寺 4. 宗甫遺跡 5. 五斗萬遺跡
 6. 向原遺跡 7. 小林城跡 8. 濱水寺 9. 向田遺跡

第2図 遺跡の位置と周辺の遺跡・文化財



第3図 遺跡周辺地形図 (■●は大門遺跡塚—昭和46年調査)

II 検出した遺構と遺物

1 旧石器時代

今回の大門遺跡の調査では、総数152点の石器が出土した。

石器はほぼ調査区全域から出土している。整理作業の過程で平面分布密度、垂直分布、石材別（母岩別）分類等の検討を行い、北東部1か所（第1ブロック）、南東部1か所（第2ブロック）、西部1か所（第3ブロック）の計3か所に石器集中地点が存在すると捉えた（第4図）。

出土層位は、3か所ともソフトロームのⅢ層を中心とした層で、Ⅱ層の下部からハードロームのⅣ層にかけてである。

大門遺跡で出土した各石器石材の特徴は、以下のとおりである。

黒曜石：色調は半透明の黒色であるが、一部白濁しているものも見られる。不純物を多く含むが、節理の混入したものは見られない。

チャート：色調は暗い青灰色、部分的に色調が明るい箇所が見られる。原石面は淡褐色である。きめは細かく光沢があり、節理の混入はほとんど見られない。

珪質頁岩：原石面は褐色、内面は褐色がかったクリーム色を呈する。きめは細かくやや光沢がある。不純物はほとんど含まない。

頁岩：色調は黄土色を呈する。きめは細かいが光沢に欠ける。部分的に微細な黒斑が見られる。

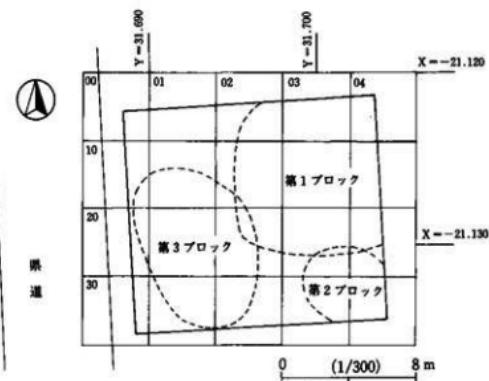
メノウ：色調は多様であり、焦げ茶色、乳白色、白色を呈し、なかでも焦げ茶色を呈するものが、石器の点数的には圧倒的に多いといえる。ただし、部分的に色調が異なるため、一概に色調により石器の母岩分類を行うのは困難である。原石面はやはり上記のような色調の違いがみられるが、かなり荒れた感は共通する。節理は多く混入するが、節理面により分離するものはまったくない。0.5mmほどの茶色を呈する球状の不純物を含むものも見られる。

安山岩：色調は黄土色であるが、欠損面は黒色を呈する。きめは粗いが均一であり、不純物はほとんど見られない。

流紋岩：色調は白色もしくは黄土色がかった白色を呈する。きめは細かくやや光沢があり、部分的に黒斑が見られる。

砂岩：色調は青灰色を呈する。岩石を構成する粒子はやや粗い感があるが、均一な大きさである。

変成岩：色調は暗灰色を呈する。きめは細かいが光沢はない。不純物が多く混入し、器表面は発癩状となる。粉っぽい感じを受ける。



第4図 旧石器時代ブロック分布図

凝灰岩：色調は灰色を呈する。きめは細かいが光沢はなく、ざらついた感がある。節理が多く混入し、節理に沿って亀裂が入るものも見られる。

石英斑岩：被熱しているため表面は若干赤化する。混入する石英は大形で1mm～10mmを測る。

第1ブロック（第5～11図、第1・2表、図版3・4）

調査区の北東側に位置する。ブロックの東側は調査区域外のため、明確なブロックの規模は把握できないが、石器は径4mほどの集中地点を中心とし、長径10mの不定形円状に分布するものと考えられる。集中地点以外は散漫な分布状況である。

ブロックを構成する石器は総計88点出土した。定型的な石器はナイフ形石器があげられ、黒曜石製、チャート製、メノウ製のものが確認できた。これらナイフ形石器は形状、大きさに差はあるものの、いずれも連続的に作出された縦長剝片を素材としており、いわゆる砂川型ナイフ形石器の一群に属するものと考えられる。ほかには凝灰岩製の彫器1点が出土している。

石器の石材はメノウが主に使用され、全体の46.6%とほぼ半数を占める。ほかに黒曜石、チャート、珪質頁岩、頁岩、安山岩、流紋岩、砂岩、凝灰岩が使用されるが、明確な剝片剝離作業の痕跡が見られるものは少ない。

出土遺物

1～7はナイフ形石器である。1～4はメノウ製、5はチャート製、6・7は黒曜石製である。

1の表面に見られる剝片剝離時の剝離の方向は、基部付近に見られる剝離以外はすべて同一方向から施されている。このことから、同一打面から連続的に剝片剝離を行った際に作出された縦長剝片を素材としていることが理解できる。調整は左側縁全部及び右側縁の基部に施され、先端部側に位置する素材剝片の打面は調整により除去されている。調整はいずれも主要剝離面側から施される。

2は1と同様に連続的に作出された縦長剝片を素材としている。調整は主要剝離面側から右側縁全部と左側縁の基部に施される。やはり調整により素材剝片の打面を除去している。

3は小形で薄い剝片を素材としている。先端部が欠損している。表面に見られる剝片剝離時の剝離の方向は、主要剝離面のそれと同一であるが、連続的に作出された素材剝片とは断定できない。調整は素材剝片の右側縁部に対して施される。

4は先端部及び基部が欠損するが、1と同様の形状と考えられる。表面に見られる剝片剝離時の剝離の方向は、主要剝離面の打面の方向と180°方向が異なる。1の表面基部付近にも同様の剝離が見られることから、上下両端に打面を設定した石核から連続的に素材剝片を作出していることが窺える。調整は主要剝離面側から右側縁全部と左側縁基部に施される。

5の調整は右側縁全部と左側縁の先端部に施され、ほかのナイフ形石器とは調整部位に違いが見られる。チャート製であり、石材についても第1ブロック内では主体的な石材であるとは言えず、製品としての搬入品である可能性が高い。しかし、表面にみられる剝片剝離時の剝離の方向は同一であり、ほかのナイフ形石器と同様の技術基盤により作出されたものと考えられる。

6・7は第1ブロックで出土したほかのナイフ形石器と比較すると小形である。6は素材剝片の末端部を先端部側とし、打面は調整により除去される。調整は右側縁に対して施され、主要剝離面側からの急角度の調整痕がみられる。また、主要剝離面側にも面的な調整が施され製品化されている。7は薄い縦長剝

片を素材とし、素材剥片の打面部を折断・除去することによりほぼ完成品としての形状を作出している。さらに主要剥離面側からの微細な調整により製品化されている。

8は凝灰岩製の影響である。原石面を多く残し、表面に見られる大きな一次剥離面は、剥片が作出されたネガティブ面である。このことから偏平な河原石を素材とし、形状を整えながら成品化していることが窺える。表面からの調整により素材の一部分を平滑化した後、1回のファシットを施すことにより彫刻刀面を作出している。

9・10は調整痕の認められる剥片である。9は流紋岩製、10はメノウ製である。9に使用される流紋岩は、大門遺跡において極めて点数が少ないが、表面にみられる剥片剥離時の剥離の方向は、同一方向に位置する打面から連続的に剥片を作出しており、第1ブロック内での剥片剥離技術と同一基盤であるといえる。両者はいずれも右側縁に調整が施されている。

11はメノウ製の使用痕の認められる剥片である。比較的大形の剥片であり、左側縁の一部に使用による微細な剥落痕が確認できる。

12・13はメノウ製の接合資料である。

12は剥片どうしの接合資料であり、12bの表面に見られる12aのネガティブ面は12aの形状を大きく上回る。12aの末端部には主要剥離面側から大きく表面に抜ける剥離痕が見られるため、剥片剥離時に中途から分離したものと考えられる。双方の打面は共通せず、12aが作出された後、打面再生が行われ、その再生された打面から12bが作出されたものと考えられる。

13は剥片利用石核と剥片の接合資料である。13bの裏面には、この接合資料が剥片として作出された当時の主要剥離面が見られる。器厚もかなりあるため、石核を打削するように打撃を加え作出されたものと考えられる。

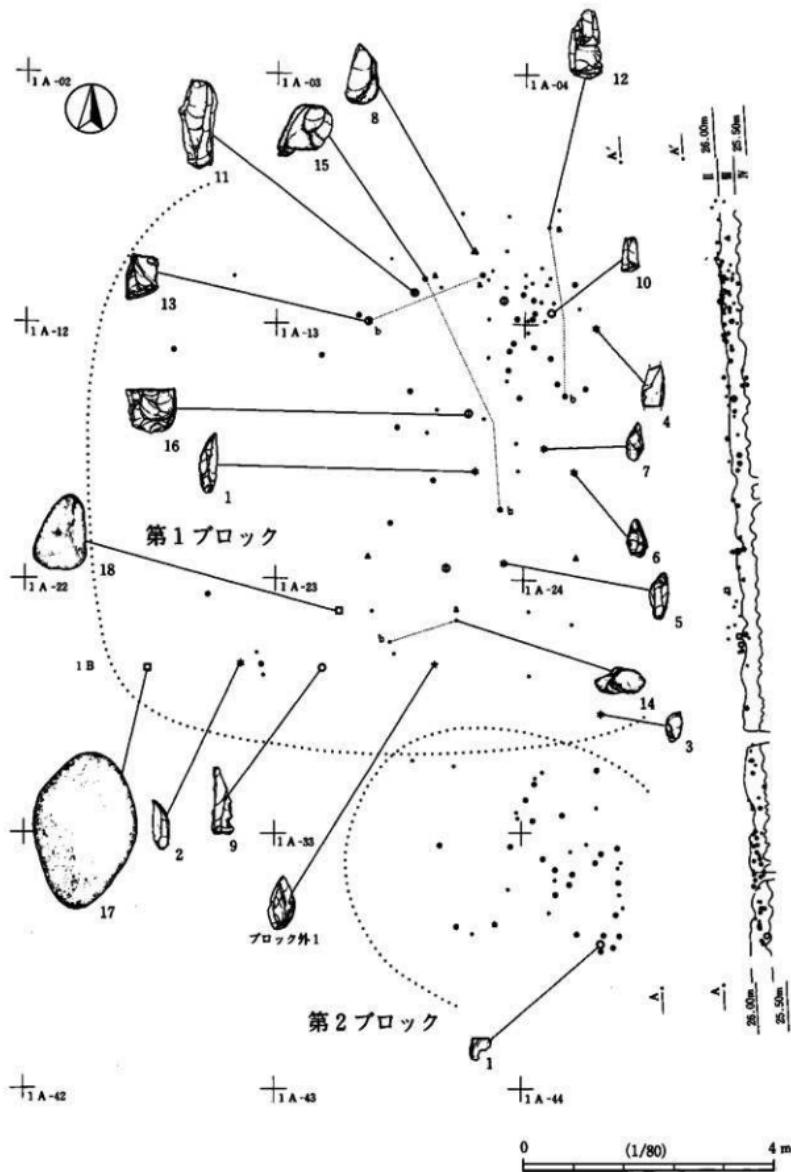
13aは、剥片利用石核の末端部を折断・除去し、その折断面を打面として作出される。表面には多方向からの剥離が見られるが、そのほとんどは大形の剥片を石核として利用する際の石核調整痕である。13a以外には剥片が作出された痕跡は見られず、1回の剥片の作出で剥片剥離作業を終了している。

14・15は安山岩製の接合資料である。いずれも剥片どうしの接合であり、また、原石面が一様に残存していることから、剥片剥離工程の初期段階に作出された剥片と考えられ、素材剥片とするより石核調整剥片としての性格が強いといえる。

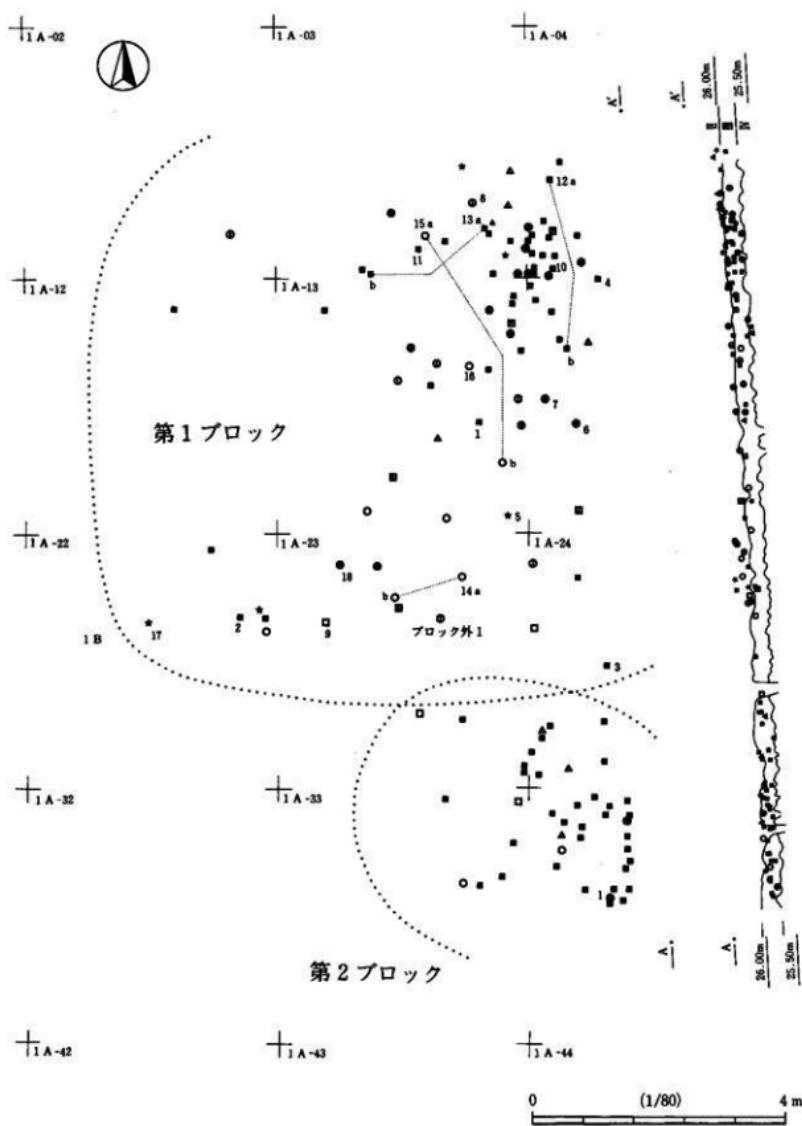
16は安山岩製の石核である。残存する原石面のようすから、剥片剥離が行われる以前の原石の形状はさほど大きくなく、5cm内外と考えられる。打面再生が頻繁に行われているが、いずれも同方向からの1回の剥離で行われている。剥片の作出は表面の1面に対して行われ、上下両方向から剥片剥離を行った痕跡が明瞭に見られる。

17は石英斑岩製の敲石である。被熱しており器表面は赤化する。実測図下部の尖端部に微細な敲打痕が集中して見られるが、敲打による剥落痕等はない。

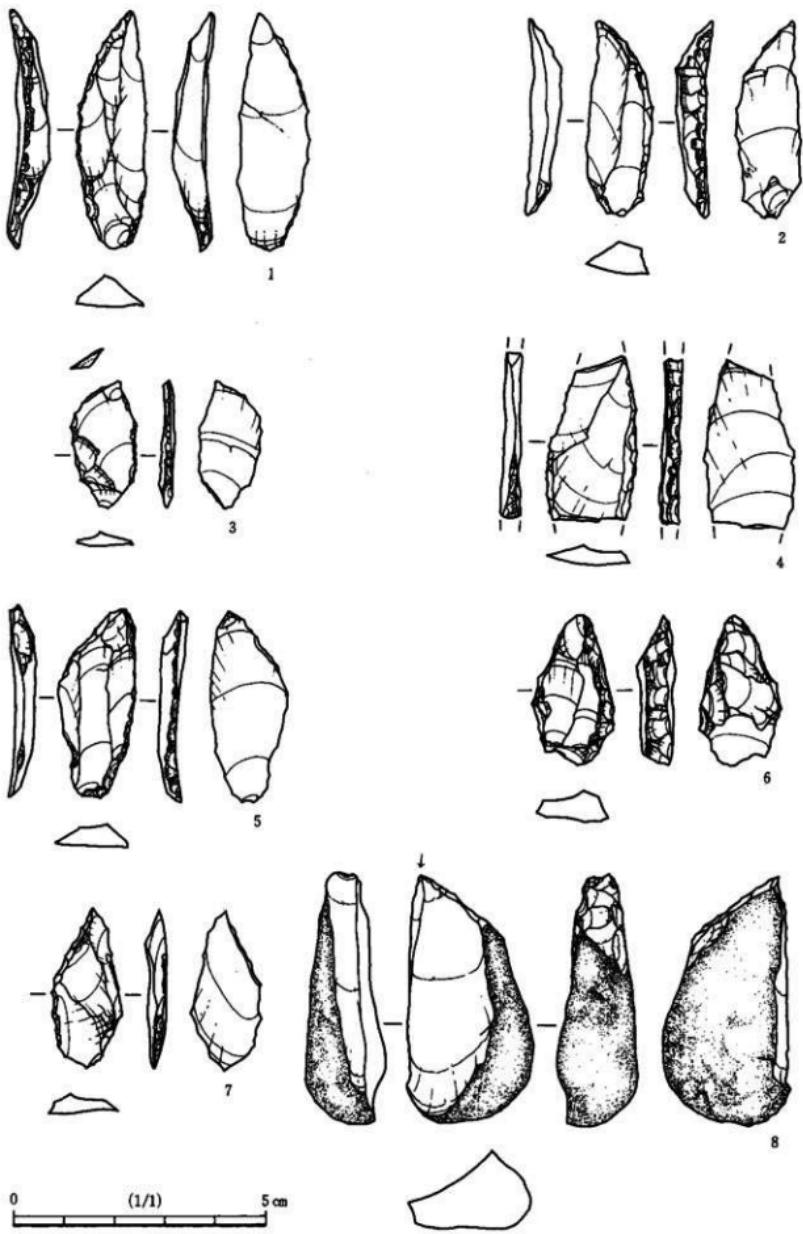
18はチャート製の敲石である。敲打痕は実測図の上下端部に見られるが、顕著な敲打痕であり、石質などの観点からも、あるいは原石として活用するため搬入された可能性も考えられる。



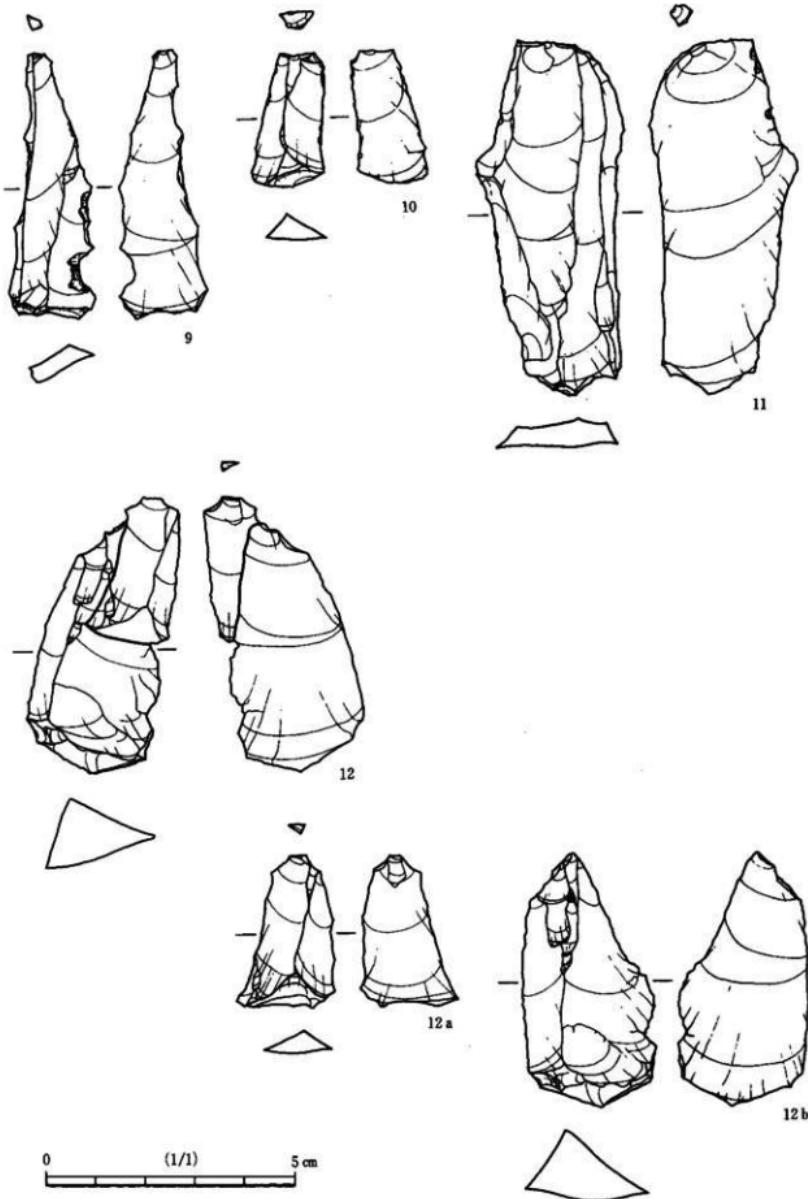
第5図 第1ブロック・第2ブロック石器出土分布図（器種別）



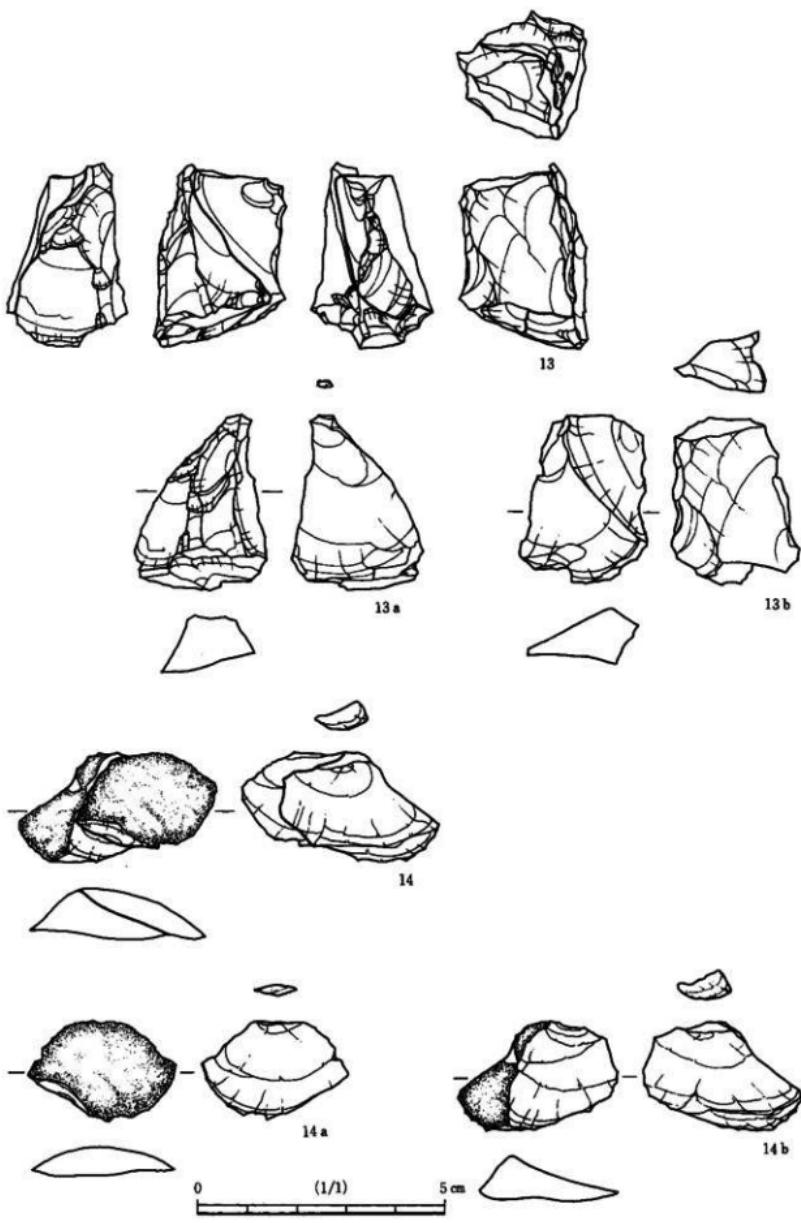
第6図 第1ブロック・第2ブロック石器出土分布図（石材別）



第7図 第1ブロック出土石器(1)



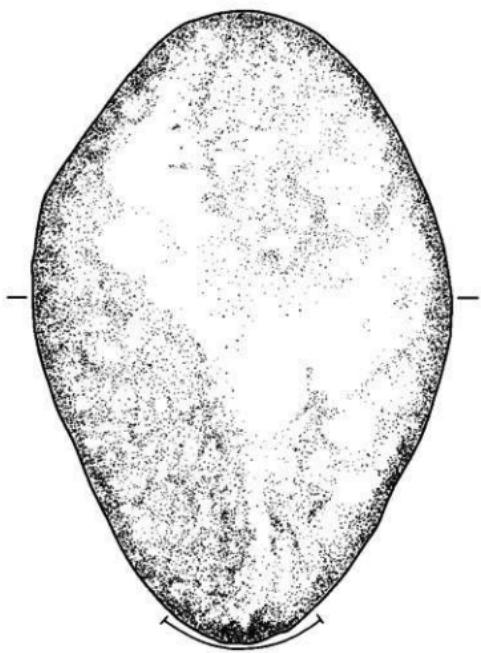
第8図 第1ブロック出土石器(2)



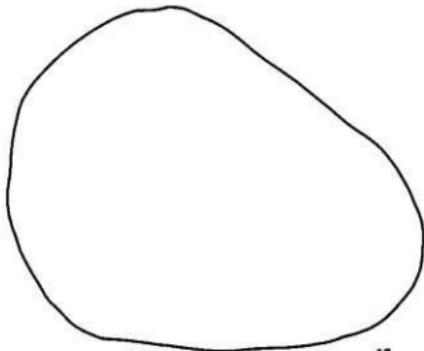
第9図 第1ブロック出土石器(3)



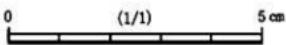
第10図 第1ブロック出土石器(4)



17



18



第11図 第1 ブロック出土石器(5)

第1表 第1ブロック石器組成表

石種	タイプ 形石器	尖頭器	圓頭器	縫石刃	石 核	解剖 石 器	刮 削 器	研 磨 器	C+S J.S.A.-L	研 磨 片	R+ フリット	U+ フリット	研 片	鉗 片	側 利 石	片 岩 核	石 核	石 核	研 石	研 石	計	
黑曜石	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	9	-	-	-	-	-	-	14	
	2.3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3.4	10.3	-	-	-	-	-	-	15.9%	
チャート	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	1	-	1	-	-	-	5	
	1.1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2.3	-	1.1	-	1.1	-	-	-	5.7%	
珪質頁岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1	
	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1.1	-	-	-	-	-	-	-	1.1%	
頁岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	2	-	-	-	-	-	-	4	
	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2.3	2.1	-	-	-	-	-	-	4.5%	
メノウ	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	10	16	1	-	-	-	-	-	41	
	4.5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1.1	1.1	20.6	18.2	1.1	-	-	-	-	-	-	46.4%
安山岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	3	-	2	-	-	1	6	6	
	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2.3	3.4	-	2.3	-	-	1.1	-	9.7%	
瓦状岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	2	-	-	-	-	3	
	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1.1	-	-	2.3	-	-	-	-	3.4%	
砂岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	2	-	-	-	-	1	5	5	
	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2.3	2.3	-	-	-	-	1.1	-	5.7%	
黒曜岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1	4	-	-	-	6	
	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1.1	-	-	1.1	4.5	-	-	-	6.8%	
石英岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	
	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1.1	-	1.1%	
計	7	-	-	-	-	-	-	-	1	-	2	1	28	41	1	3	-	2	2	2	86	
	8.0%	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1.1%	-	2.3%	1.1%	31.8%	46.6%	1.1%	3.6%	-	2.3%	2.3%	100.0%

第2表 第1ブロック石器観察表

採回番号	遺物番号	器種	石質	計測値			備考	
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)		
第7回1	IA-13.18	ナイフ形石器	メノウ	4.78	1.38	0.63	3.94 左側縁部および両基部に調整痕	
	2	IA-22.11	ナイフ形石器	メノウ	3.98	1.34	0.65	3.18 右側縁部および両基部に調整痕
	3	IA-24.7	ナイフ形石器	メノウ	2.48	1.27	0.25	1.04 先端部欠損。右側縁部のみに微細な調整痕
	4	IA-14.10	ナイフ形石器	メノウ	3.18	1.76	0.39	3.03 先端部および基部欠損。右側縁部および両基部に調整痕
	5	IA-13.22	ナイフ形石器	チャート	3.71	1.52	0.47	2.85 右側縁部および先端部に微細な調整痕
	6	IA-14.6	ナイフ形石器	黒曜石	2.98	1.67	0.69	3.55 基部欠損。右側縁部および裏面に調整痕
	7	IA-14.4	ナイフ形石器	黒曜石	3.07	1.38	0.36	1.46 左側縁部および両基部に微細な調整痕
	8	IA-03.18	鉗	黒曜岩	5.01	2.57	1.64	21.28 原石面残存。調整面よりフルーティング
第8回9	IA-23.11	調整痕ある剝片	泥灰岩	5.32	1.68	0.57	4.71 右側縁部の一部に調整痕	
	10	IA-04.4	調整痕ある剝片	メノウ	2.78	1.47	0.47	2.01 右側縁部の一部に微細な調整痕
	11	IA-03.13	使用歴ある剝片	メノウ	7.04	3.07	0.65	15.08 左側縁部に使用による剥落痕
	12	総合資料	メノウ	5.48	3.12	1.57	15.51	
a	IA-04.9	鉗片	-	3.01	2.92	0.39	2.26	
b	IA-14.9	鉗片	-	4.99	2.07	1.21	13.25	
第9回13	14	総合資料	メノウ	3.71	2.66	2.42	20.89	
a	IA-03.14	鉗片	-	2.22	3.72	2.17	11.06	
b	IA-03.11	鉗片利用石核	-	1.75	3.28	2.65	9.83	
	14	総合資料	安山岩	2.17	3.94	1.03	9.00 原石面残存	
a	IA-23.5	鉗片	-	1.89	2.74	0.68	3.65	
b	IA-23.6	鉗片	-	2.40	3.08	0.91	5.35	
第10回15	15	総合資料	安山岩	4.29	4.22	0.85	13.30 原石面残存	
a	IA-03.9	鉗片	-	3.87	3.34	0.63	8.79	
b	IA-13.10	鉗片	-	4.12	3.13	0.68	4.51	
16	IA-13.15	石核	安山岩	3.42	3.85	3.56	55.52 原石面残存	
第11回17	17	鉗石	石英斑岩	12.31	8.45	6.75	810.05	
18	IA-22.7	鉗石	チャート	5.91	4.26	3.85	98.03	

第2ブロック (第5・6・12図、第3・4表、図版5)

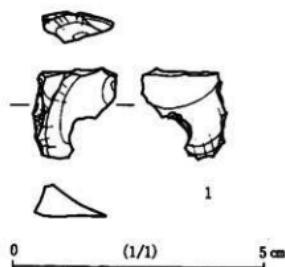
調査区の南東部に位置し、第1ブロックに隣接する。

ブロックの南東側は調査区域外のため明確なブロックの規模は把握できないが、石器の平面分布はほぼ4mの円形の範囲内に収まると考えられる。第1ブロックのように遺物が拡散することはない。

石器は合計42点出土し、その大半がメノウ製の石器で占められる。そのほかに使用される石器石材は、第1ブロックと極めて類似するが、石器組成の点では調整痕の認められる剝片1点以外はすべて剝片、碎片であり、ナイフ形石器などの定型的な石器の出土は見られない。

出土遺物

1は黒曜石製の調整痕の認められる剝片である。素材剝片の打面側が欠損しているため、剝片剝離により作出された時点の形状は不明であるが、小形の継長剝片と推測される。調整は素材剝片末端部の左側縁を中心に施され、主要剝離面側からの急角度の剝離により施される。右側縁にはノッチ状の微細な調整が施される。



第12図 第2ブロック出土石器

第3章 第2ブロック石器組成表

石材	モルタルセメント												セメントモルタル												
	ナイフ 刮削器	火薬錠	磨石機	磨石刀	合 成 石	有 機 石	内 燃 机 械	電 動 机 械	ビ ス ス ト ラ ッ ク	手 工 具	手 工 具	手 工 具	1- 70kg	U- 70kg	鋼 片	鉄 片	片	片	片	片	石 板	石 膏	浮 石	石 墨	計
黒 曜 石	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	
真 理 石	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4.8%	
真 理 石	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	
メ ノ ウ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	21	12	-	-	-	-	-	-	-	30
メ ノ ウ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	26.6	26.6	-	-	-	-	-	-	-	76.2%
黄 山 石	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	2
黄 山 石	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	6.8	-	-	-	-	-	-	-	4.8%
花 崗 岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	2
花 崗 岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2.6	4.5	-	-	-	-	-	-	-	4.8%
計	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	25	36	-	-	-	-	-	42
計	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2.4%	-	39.5%	38.1%	-	-	-	-	-	100.0%

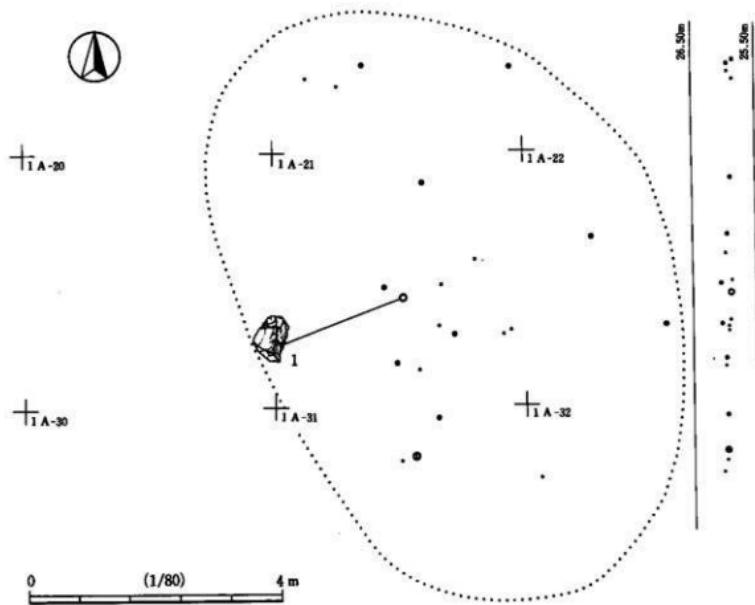
第4表 第2ブロック石器觀察表

採集番号	遺物番号	器種	石質	計測値				備考
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	
第12回1	IA-34,26	調整痕のある片剝	黑曜石	1.76	1.65	0.63	1.20	打面部折断・除去。左側縫部に調整痕

第3ブロック (第13~15図、第5・6表、図版5)

調査区の西部に位置し、長径 6 m、短径 4 m 程の長椭円形状に遺物が分布する。一部第 1 ブロックと分布が重複する。

出土した石器は総計21点を数え、石器の分布範囲は広いが、他のブロックと比較すると特に集中する箇所は見られず、小規模なブロックといえる。ブロックを構成する石器は、調整痕の認められる剝片と石核と思われるものが1点ずつ出土するほかはすべて剝片、碎片であり、石器組成の点からは第2ブロックと類似した性格である。石器石材はメノウ製の石器が半数を占め、ほかに使用される石材も第1、第2ブロックとほぼ同一である。



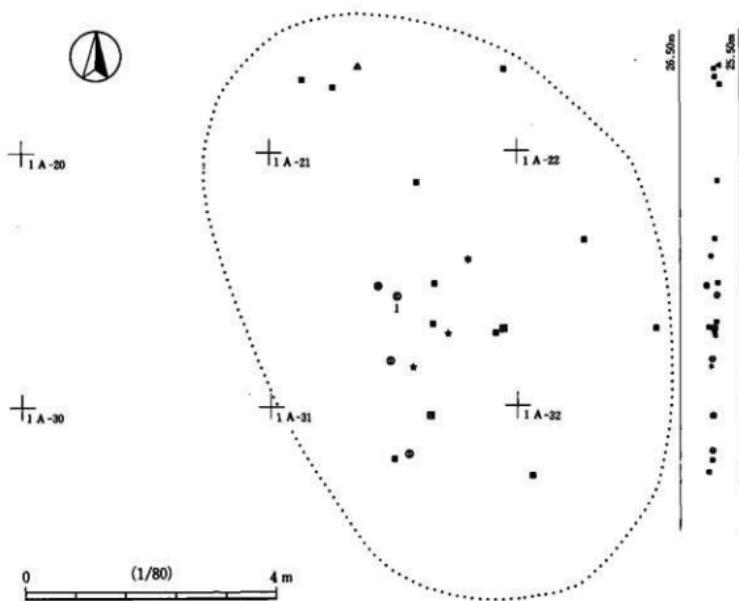
第13図 第3ブロック石器出土分布図（器種別）

第5表 第3ブロック石器組成表

樹種 石材	ナイフ 磨石用	尖頭 磨石板	細石刀	色 合 成 石	内部 研 磨	外部 研 磨	ガラス スラッシュ	形 状	削 除	R- ワード	U- ワード	鏡 片	砂 粒	倒 片 用 紙	研 紙	石 膏	研 石	糊	計
高 硬 石	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1
	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4.8	-	-	-	-	-	4.8%
チャート	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	2
	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4.8	4.8	-	-	-	-	-	9.6%
黄 磷 石	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1
	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4.8	-	-	-	-	-	-	4.8%
メノウ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	7	-	-	-	-	-	11
	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	18.0	20.2	-	-	-	-	-	38.2%
砂 岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	2
	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4.8	4.8	-	-	-	-	-	9.6%
変 成 石	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1
	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4.8	-	-	-	-	-	4.8%
酸 灰 石	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	2
	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4.8	4.8	-	-	-	-	-	14.4%
計	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	8	11	-	1	-	-	21
	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4.8%	38.1%	52.3%	-	4.8%	-	-	100.0%

第6表 第3ブロック石器観察表

採集番号	遺物番号	種類	石質	計測値			備考
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	
第1541	IA-21.15	圓盤状ある鋸片	凝灰岩	3.55	2.64	1.21	10.06 右側縫合に圓盤狀

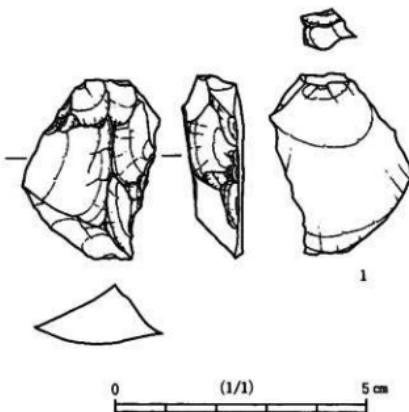


第14図 第3ブロック石器出土分布図（石材別）

出土遺物

1は凝灰岩製の調整痕の認められる剝片である。打面を広く設定し作出されているため、部厚な剝片である。調整は右側縁の一部に対して行われ、素材剝片の形状を変えるような粗い調整が主要剝離面側から施される。

凝灰岩製の石器は大門遺跡では点数的に少なく、また明確な剝片剝離作業の行われた痕跡は見られない。これは第3ブロックにおいても同様であり、図示した石器以外に小形の石核と思われるものが出土しているが、剝片剝離の痕跡は明確には認められない。また、1の石器は表面に多方向からの剝離が存在することから、剝片剝離技術においても他の凝灰岩製のものとの違いが認められ、調整が施された状態での搬入品と考えられる。

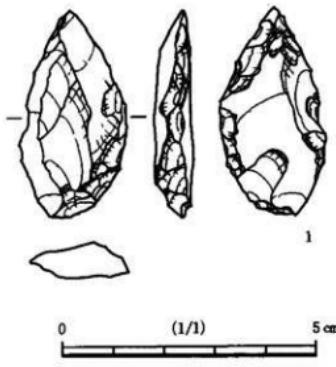


第15図 第3ブロック出土石器

ブロック外出土石器（第5・16図、第7表、図版5）

槍先形尖頭器がブロックを形成せず、単独で出土している（IA-23グリッド）。

凝灰岩製であるが、第1～第3ブロックで出土している凝灰岩とは質感が異なり、青灰色を呈し、器表面は水和層が発達するためややざらついた感がある。縦長剥片を素材とし、調整は主に主要剝離面に対して行われ、周縁部の形状を整えるように調整が施される。表面に対しても若干調整が施されるが、主要剝離面側のそれとは異なり、急角度の調整により行われている。



第16図 ブロック外出土石器

第7表 ブロック外石器観察表

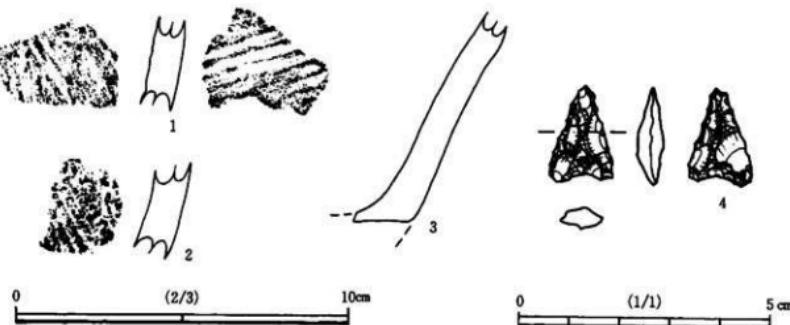
探査番号	遺物番号	器種	石質	計測値			備考
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	
第16図1	IA-23.7	槍先形尖頭器	凝灰岩	4.12	2.15	0.81	6.92 周縁部に調整痕

2 繩文時代

今回の大門遺跡の調査では、繩文時代に属する遺構は検出されなかった。遺物についても繩文土器の細片が10点あまりと石鏃1点が出土したのみである。

出土遺物（第17図 図版5）

1～3は土器である。1は内外面ともに条痕が施され、胎土に纖維が含まれる。2は器面に繩文が施され、胎土に纖維が含まれる。3は底部で、外に開きながら立ち上がっていく。無文である。胎土に雲母粒が含まれる。

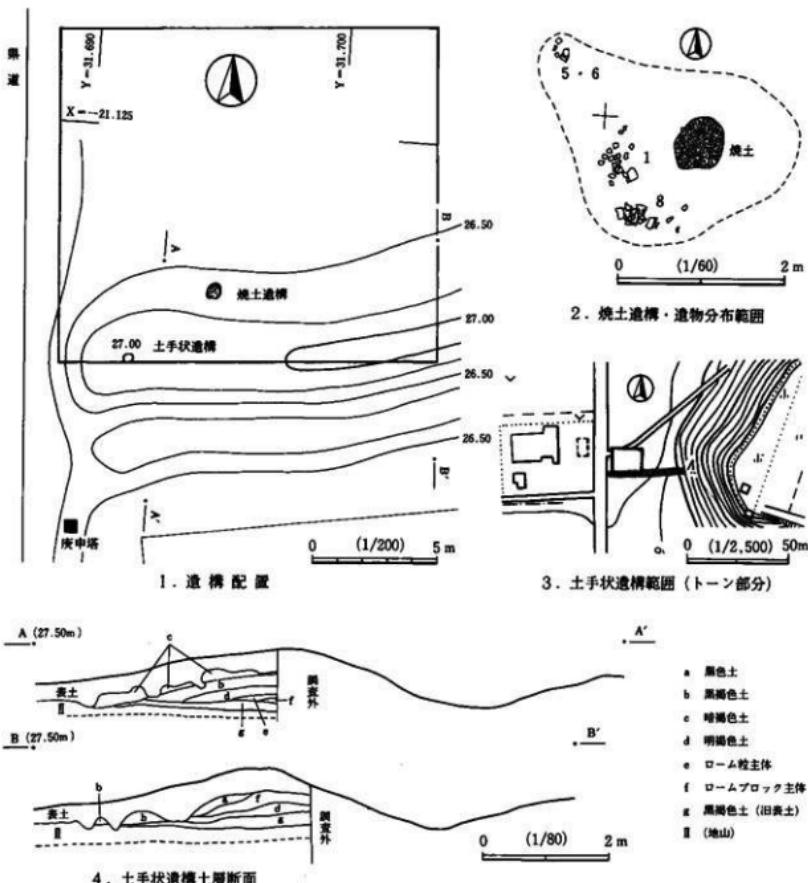


第17図 繩文時代遺物

4は黒曜石製の石鏃である。部厚な作りであり、調整はほぼ全面にわたって施される。平面形状は二等辺三角形を呈し、基部はやや窪む程度である。断定はできないが、その形状から前期に属するものと考えられる。重さ0.76gを測る。

3 中近世

今回の調査では、焼土遺構が検出され、その周囲から土鍋・擂鉢が出土した。また、土手状遺構が調査区の南側に検出された。



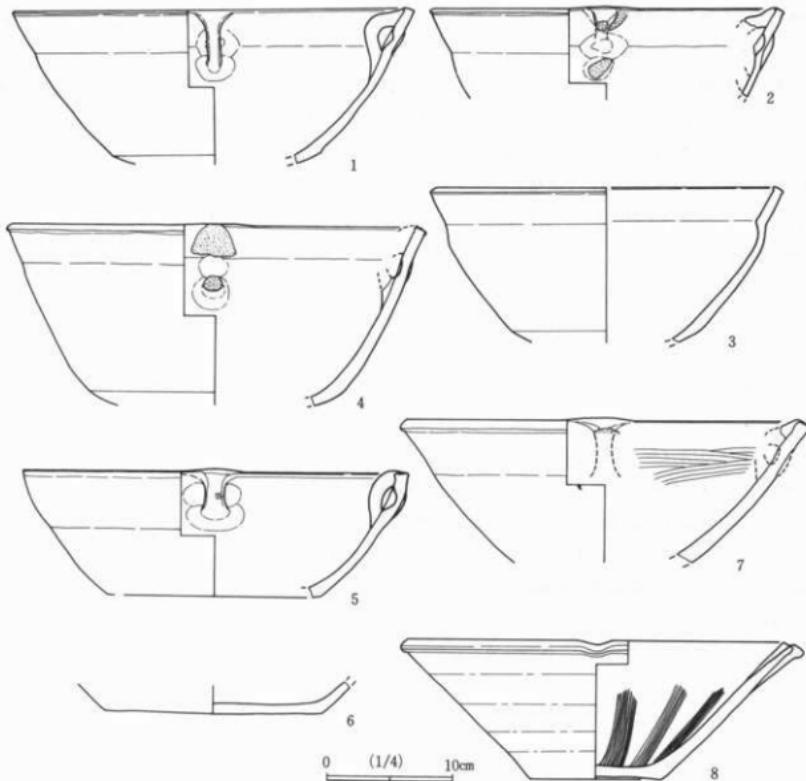
第18図 中近世遺構実測図

(1) 焼土遺構 (第18・19図 図版2・6)

II層中から、径0.6m、厚さ0.05mの範囲で焼土が検出された。炭化材等は混入しておらず、焼土下面も被熱による硬化が認められなかった。また、掘り込みも認められなかったが、地床炉として機能していたものと考えられる。この焼土内及び周囲から土鍋や擂鉢がこの焼土とほぼ同一レベルで出土したことから、焼土とこれらの土器が伴うものと考えられる。焼土周辺を精査したが、柱穴等の建物跡や土坑等は検出されなかった。

出土遺物

1・5・6・8はそれぞれ潰れた状態で出土している。ほかの土器は第18図2の破線の範囲内に集中している。土鍋はいわゆる内耳鍋で、推定5個体出土している。擂鉢は1個体出土している。



第19図 焼土遺構出土遺物

1～7は土鍋である。1は体部が直線的に開き頸部でわずかにくびれ口縁部が外反する。底部は丸底になる。口径31.6cm、底径16.3cm、残存高12.0cm、推定高13.0cm、全体の3/4遺存する。胎土に白色粒を含む。土師質で、色調は茶褐色から黒褐色である。体部から口縁部にかけて煤が付着している。内耳は1個1対と思われる。2・3は接合しなかったが器形・胎土・色調からみて同一個体となる。器形は1と同じである。口径28.0cm、底径14.5cm、残存高12.1cm、推定高13.0cmである。2は口縁部が1/3、3は口縁部から底部付近にかけて1/6遺存する。胎土に白色粒を含む。土師質で、色調は暗褐色から黒褐色である。体部から口縁部にかけて煤が付着している。2には内耳部分が1か所残存するが、耳部が欠落している。4は頸部のくびれが少なく体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。底部は丸底になる。口径33.0cm、底径20.0cm、残存高14.0cm、推定高15.0cm、全体の1/4遺存する。瓦質で、色調は外面が黄灰色、内面の口縁部が黄灰色、体部が黒褐色である。底部付近にわずかに煤が付着している。内耳部分が1か所残存するが、耳部が欠落している。5・6は接合しなかったが同一地点からの出土で、器形・胎土・色調からみて同一個体となる。器形は体部から口縁部は1と同じであるが、底部が平底になる。口径30.2cm、底径16.8cm、器高9.8cmである。5は口縁部から底部付近にかけて1/4、6は底部が1/3遺存する。胎土に雲母粒・白色粒を含む。土師質で、色調は暗褐色から黒褐色である。体部から口縁部にかけて煤が付着している。内耳部分が1か所残存するが、同一個体の耳部破片が出土しており1個1対になると思われる。7は体部から口縁部にかけてほぼ直線的に立ち上がる器形である。口径32.4cm、残存高11.0cmである。口縁部が2/5、体部が1/3遺存する。内面が工具による横方向のナデを行い、凹凸の調整痕を明瞭に残す。胎土に白色粒を含む。瓦質で、色調は灰色である。口縁部にわずかに煤が付着している。内耳部分が1か所残存するが、耳部が欠落している。

8は擂鉢で口縁部の一端に片口を有する。器形は体部から口縁部にかけて開きながら直線的に立ち上がる。口唇部に浅い溝がめぐる。内面に幅1.8cm、9条ほどの磨り目がおよそ等間隔で13単位（推定）施される。口径31.0cm、底径10.4cm、器高10.8cmで、器高と口径の比がおよそ1：3ほどで、やや扁平な形状である。口縁部から底部にかけて4/5遺存する。胎土に白色粒を含む。瓦質で、色調は灰色から黄灰色である。

(2) 土手状遺構（第18図 図版2）

調査区の南側に県道から東に向かって続く土手状の遺構が検出された。見かけの高さは0.5mほどの低いものである。調査は、調査区周辺の測量、土層観察を行った後、盛土全体を掘り下げた。遺物は出土しなかった。土手の南側が溝状に窪んでいるが、調査区外のため未調査である。この土手はさらに東に向かって続いており、台地の縁辺部まで確認された。

土層観察によると、旧表面から0.7mほどが盛土部分となる。盛土は水平方向に積まれている。土手の南側が溝状に窪んでいることから、南側に溝を掘削してその土を盛土にしたものと考えられる。

III まとめ

1 旧石器時代

検出された3ブロックは、文化層の観点からはいずれも同一文化層に属するものと捉えた。層序区分的には主に石器の出土したⅢ層に属する。

しかし、このⅢ層としたソフトロームは、下総台地では第1黒色帯（V層）及び第1黒色帶上部（IV層）に位置する層が取り込まれてソフト化している。本遺跡でも、Ⅲ層のクラックがV層にまで及んでいる。このように垂直分布を見た限りでは、本来のⅢ層より下層から出土したものでも土層柱状図のⅢ層（ソフトローム）にすべての石器が集中してしまい、ナイフ形石器、槍先形尖頭器、細石刃が共伴すると受け取られてしまう危険性が多分にあると指摘されている¹⁾。つまり、Ⅲ層付近から検出したブロックは、観察した層位とともに各文化層の示準となる定型的な石器や石器製作技術等も考慮に入れて、文化層の帰属層位を考えていく必要がある。

そこで今回の調査で出土している7点のナイフ形石器に着目すると、砂川型刃器技法に基づく石器製作の痕跡が窺えることから、第1ブロックはIV層上部付近に属するものとして考えられる。

各ブロックで使用される石材は多種にわたっており、石器に使用される石材をほぼ網羅しているといえよう。このなかでも特にメノウについては、各ブロックとともに出土した石器の半数近くがこの石材を使用したものである。メノウ以外は、安山岩を除いて剝片剥離の行われた痕跡は不明瞭であり、各ブロックを構成する石器石材のなかでは客体的であるといえる。また、メノウの石材における色調などの特徴は、ブロックを問わず極めて類似しており、石材の原産地は同一であると考えられる。かつ、同一母岩の可能性も否定できない。この点でそれぞれのブロックが同一文化層に属するものと捉えた。しかし、各ブロック間のメノウを石材とした石器には接合関係は見られなかった。

2 中近世

(1) 焼土遺構と土鍋・擂鉢

焼土の周囲からは、カマドの痕跡は認められなかった。焼土の堆積状況から見て短期間に使用された炉跡と考えられる。周辺からは明確な建物跡と見られる遺構や土坑は検出されていない。調理具である擂鉢、煮炊具である土鍋が出土したことは、ここで何らかの生活が営まれていたことが考えられる。

土鍋は、土師質や瓦質（須恵質）があるが、すべて在地系土器である。底部は丸底のものもあり、鉄鍋を模倣したものと思われる。5・6の土鍋は、雲母混じりの胎土や平底という点でほかの土鍋と違いが見られ、常陸産の製品に類似している。擂鉢も、瓦質で在地系土器である。口縁部の一端に片口を有し、器高と口径の比が1対3ほどのやや扁平な形状である。これらの土鍋・擂鉢は、15世紀後半の所産と考えられる²⁾。

旧龍腹寺が焼き討ちにあったのが1507年ということから、本遺構・遺物の時期が旧龍腹寺が存在していた時期に当たり、その関係が注目される。

(2) 土手状遺構

今回の調査は、土手の一部分だけの調査である。この土手の旧表土下から前述の焼土遺構が検出されたことにより、本遺構はそれよりは新しいことが言える。形態的に見て近世の「野馬除土手」の可能性も窺える。台地の一番狭まったところに位置し、野馬の侵入を防ぐ意味では「野馬除土手」としては効率的な場所になる。しかし、県道をはさんだ西側は、現在宅地と畑地のため土手が築かれていたかは不明である。

本土手の性格を窺い知れる明確な資料に欠けるので、ここでは近世以降の土手状遺構としておく。

注 1 落合章雄 1993 「千葉北部地区新市街地造成整備関連埋蔵文化財調査報告書Ⅰ」 財団法人千葉県文化財センター

2 浅野春樹氏の縦年による。

浅野春樹 1991 「東国における中世在地系土器について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第31集 国立歴史民俗博物館

写 真 図 版



遺跡周辺航空写真



調査風景



焼土遺構遺物出土状況



焼土遺構・遺物出土状況



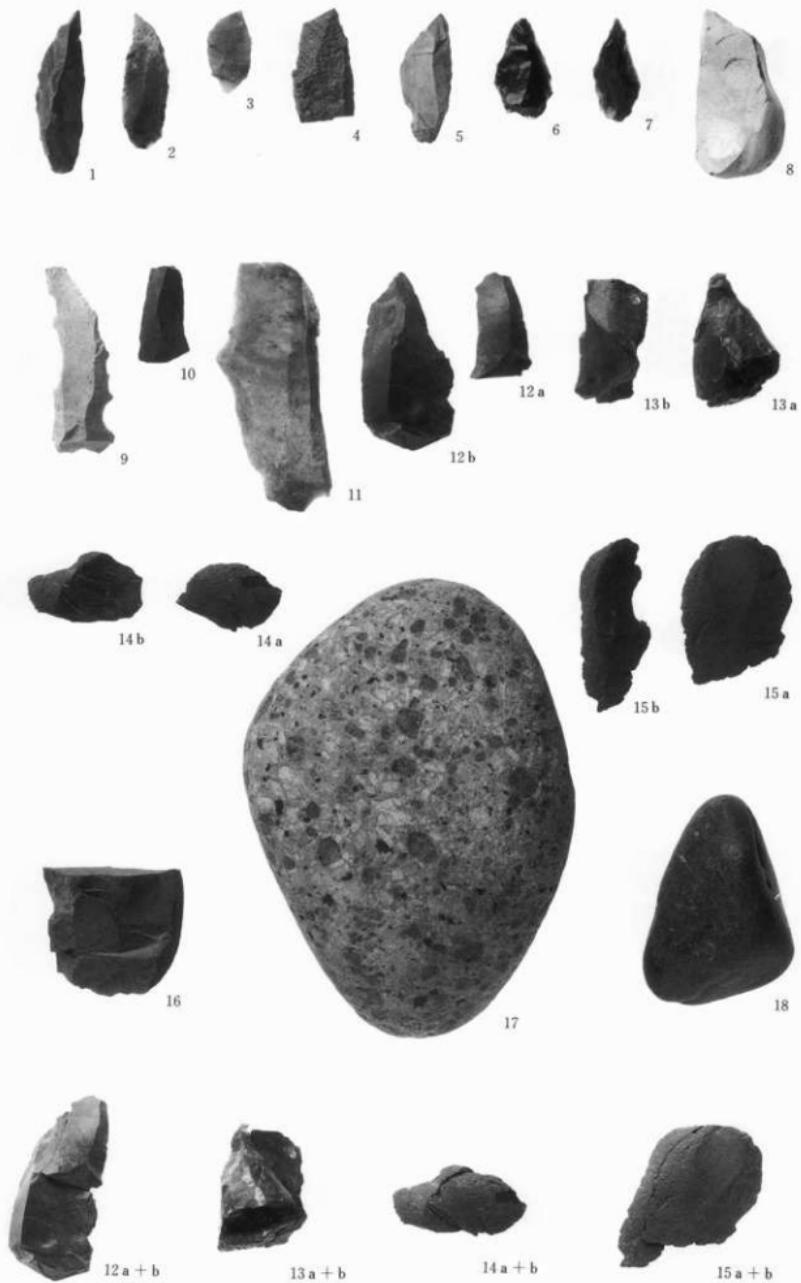
焼土遺構遺物出土状況



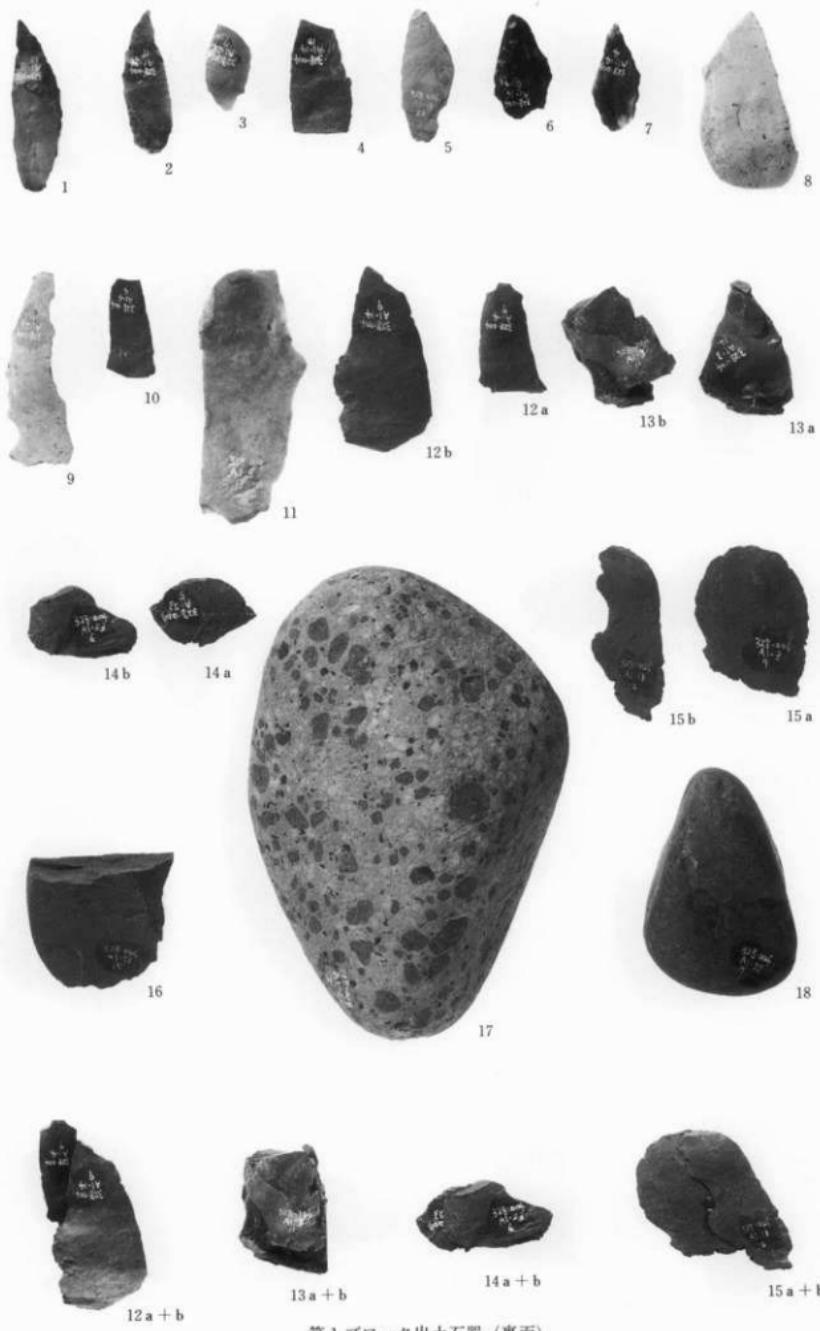
土手状遺構近景



土手状遺構土層



第1 ブロック出土石器（正面）



第1ブロック出土石器（裏面）



第2 ブロック出土石器



第3 ブロック出土石器



ブロック外出土石器



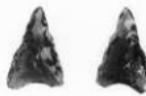
縄文1



縄文3



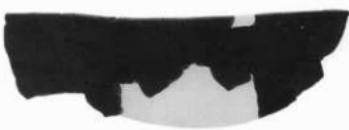
縄文2



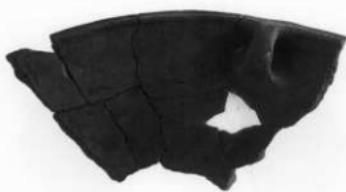
縄文4



中世1



中世2



中世 5



中世 4



中世 6



中世 7



中世 8



庚申塔 (調査区臨路傍)

報告書抄録

ふりがな	もとのむらだいもんいせき							
書名	本塙村大門遺跡							
副書名	本塙アクセス光設備埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告							
シリーズ番号	第313集							
編著者名	柳原 弘二							
調査機関	財団法人千葉県文化財センター							
所在地	〒284 千葉県四街道市鹿渡809番地2 TEL043-422-8811							
発行年月日	西暦1997年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 °' "	東經 °' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
大門遺跡	千葉県印旛郡 本塙村鹿397-3番地ほか	12328	004	35度 48分 32秒	140度 11分 03秒	1996.8.06～ 1996.8.22	195m ²	通信設備工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
大門	包蔵地	旧石器 縄文 中世	石器ブロック3か所 焼土遺構		ナイフ形石器、彫器 槍先型尖頭器、敲石 剥片 土器、石器 土鍋(内耳鍋) 擂鉢	ナイフ形石器は、砂川型刃器技法が認められる。	15世紀後半の在地系土器が出土した。	

千葉県文化財センター調査報告第313集

本塙村大門遺跡

—本塙アクセス光設備埋蔵文化財調査報告書—

平成9年3月31日発行

編 集 財團法人 千葉県文化財センター

発 行 日本電信電話株式会社千葉支店

千葉市美浜区中瀬1-6

財團法人 千葉県文化財センター

四街道市鹿渡809-2

印 刷 株式会社 エリート印刷

千葉市中央区市場町6-8
